

研究活動報告 子育て支援プログラム活動報告

著者	新道 賢一, 岩本 沙那佳
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	16
ページ	133-136
発行年	2015-02-28
URL	http://doi.org/10.14990/00002801

子育て支援プログラム活動報告

一 はじめに

本稿では、甲南大学人間科学研究所、および、甲南大学心理臨床カウンセリングルームの共同で開催された、子育て支援プログラムについての活動報告を行う。

今年度開催された子育て支援プログラムは、「うりぼうくらぶ」、「子育てサークルまっぼっくり&プレイグループどんぐり」の二種類である。

二 うりぼうくらぶ

うりぼうくらぶは、毎月第二・四火曜日の午前十一時から十二時半に、地域の親子（就学前の子どもとその保護者）を対象とした子育て支援プログラムである。毎回予約制であり、二〇一四年は十九回開催した。プログラムの前半は、親子で参加できるふれあい遊びや手遊び、季節に合わせた制作活動や運動を行う。親子が安心できる雰囲気の中で、遊びを通して親子の交

流を促進できるよう心がけている。また、後半の自由遊びは、子どもの自発的、主体的な活動を重視している。二〇一四年二月から三月に実施した参加者対象のアンケートから「家ではできない遊び、体験ができる」、「無理がない進め方なので、個人のペースが守られて良い」などの感想が寄せられた。今後は、地域に根づいた子育て支援プログラムとしてさらに発展できるように努めたい。

三 子育てサークルまっぼっくり&プレイグループ

どんぐり

「子育てサークルまっぼっくり&プレイグループどんぐり」は、就学前の子どもとその保護者を対象とし、保護者と子どもがそれぞれグループに分かれて行う活動である。子どものグループが「プレイグループどんぐり」、保護者のグループが「子育てサークルまっぼっくり」となっており、両者は同じ日時に同時並行で別々の場所で開催される。全五回の活動を一クールとし、前期・後期と年間二クール行う。参加者は各クールごとに募集し、固定したメンバーで一クール活動する。前期は六月から七月にかけて隔週水曜日十時半から十二時までの九十分を五回、後期は十月から十二月にかけて同じく同時時間帯の隔週水曜日で開催された。

それぞれの活動のあらまは以下の通りである。

三―一 二〇一四年度前期（第二十四期）

第二十四期は、これまで以前にも参加の経験のある五組の親子、母親五名と子ども六名が参加した。参加のべ人数は、保護者二十一名、子ども十二名、合計三十三名であった。まっほっくりのスタッフは後述のプログラムの通り、どんぐりのスタッフはカウンセリングルームのルーム相談員一名、修了生で本活動の経験者三名が活動の中心を担い、最終回のみ修士課程の大学院生三名が加わった。

子育てサークルまっほっくりのプログラムは以下の通りである。

第一回…「偏愛マップ」本企画担当の新道が、参加者同志普

段とは異なる視点から知りあうことを目的としたワークを実施した。参加者同士はすでに顔なじみであったが、このワークを通じて初めて知った意外な面などがあつたようである。

第二回…「体験ワーク」本学修了生の甲斐暁子先生がファシリテーターとなってグループワークを行った。参加者が今ここで話題にしたいことを持ち寄り、話し合える機会が持たれた。

第三回…「茶道体験」本学学生相談室の友久茂子先生に出講

していただき、十八号館グループワーク室を使って、茶道の体験を行った。

第四回…「体験・グループ箱庭」普段使用している甲南大学

十八号館の教室から、場所をカウンセリングルームの面接室に移し、新道がファシリテーターとなり、グループ箱庭を実施。参加者にとって初めて箱庭を制作する体験となった。

第五回…「子育て講話」本学名誉教授の松尾恒子先生に出講

していただき、エゴグラムを使いながら参加者の子育てについて話し合った。

三―二 二〇一四年度後期（第二十五期）

第二十五期は、第二十四期と同じメンバー、五組の親子、母親五名と子ども五名が参加した。参加のべ人数は、保護者十九名、子ども十名、合計二十九名であった。まっほっくりのスタッフは後述のプログラムの通り、どんぐりのスタッフはカウンセリングルームのルーム相談員一名、修了生で本活動の経験者三名であった。

子育てサークルまっほっくりのプログラムは以下の通りである。

第一回…「体験ワーク」本学修了生の甲斐暁子先生がファシリテーターとなってグループワークを行った。今回も、今ここで話題にしたいことを持ち寄り、話し合いの機会が持たれた。

第二回…「箱庭体験①」前のクールで行った箱庭が好評であったため、今回は箱庭療法さながらの箱庭制作体験を実施した。最初にファシリテーターの新道から、箱庭についての簡単なレクチャーや最相葉月著『セラピスト』（新潮社刊、二〇一四年）の紹介を行い、実際の制作に入ってもらった。

第三回…「箱庭体験②」前回の続きで、今回は作り手／見守り手の役割を交代して実施。制作後、箱庭を体験したこととの感想を自由に述べ合った。

第四回…「茶道体験」本学学生相談室の友久茂子先生に出講していただき、十八号館グループワーク室を使って、茶道の体験を行った。今回は参加者が中心となってお茶を立てた。

第五回…「子育て講話」本学名誉教授の松尾恒子先生に出講していただき、「甘えと自立」をテーマに子育てについて話し合った。

前期・後期、各全五回のプログラムを通じて参加者から、同

じ立場にある人からアドバイスや悩んでいることを聞けることが自分の支えになっているという声が多く寄せられた。グループワークを通じて、参加者同士の関係が深くなっていること、また今年度は特に前年度から参加者の顔ぶれが同じであったことも、グループが支えと感じられる大きな要因になっていたようである。

一方のプレイグループぶんぐりについては、ほぼ毎回参加していた子どもは二人で、そこにときどき他の子が入るという状況であった。

興味深かったのは、一歳すぎの女兒である。前年度から母親と別れるたびに泣き、今年度も当初は開催時間のほとんどを泣いて過ごし、泣いていないのは泣き疲れて寝たときだけであった。しかし、あるときふと泣きながらスタッフの顔色をうかがっていることに気がついた。いつの間にかこんな余裕が生まれてきたのだろう、と不思議に思っていると、次の回以降は、母親と別れるときに若干声を上げるだけになり、残りの時間を遊んで過ごせるようになった。最終的には、母親に手を振って別れることができ、時間中も泣くことはなくなり、他児と遊ぶことも増えてきた。子どもの成長がそのようにさせたという要因も大きいだろうが、スタッフのかかわり、かかわりながらの子どもの状態の推測も一役買っていたのではないかと感じられた。

四 おわりに

以上、今年度の子育て支援プログラムについての報告を行った。

来年度も引き続き地域の子育て支援を行う場、臨床心理士による地域貢献の場として、各種の活動を続けてゆく所存である。

(新道 賢一・岩本 沙耶佳)